

---

# 東方宥希想

Y U G O

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方宥希想

### 【Nコード】

N1304M

### 【作者名】

YUGO

### 【あらすじ】

宥希「俺が主人公？」

レミリア「そういう運命みたいね」

## 異能力（前書き）

えー

この作品を書かせていただくYUGOです。

まあ、ぐだぐだだけど、観ていただければ幸いです

## 異能力

「宥希、本当に辞めるんだな」

神崎「はい、迷惑はかけられませんので」

ここは、とある高校のよくある退部風景…

いつからだろう…俺が日常のつまらなさから新しい世界の非日常をおくりたいという願望が生まれたのは…

だから、俺は色んな部活をしていた。おかげで身体能力は人間離れしている。

勿論、自慢だ…

そして今、高校の最後の学生生活がある友達に薦められたゲームをしていた。

東方というゲームだ、最初は家にいる時の暇つぶしにと、思っていたが、BGMにや弾幕がなかなかよく作られていてそして奥が深い、そういう所にはまってしまった。

いや、東方の世界に入って現実逃避をしたかっただけなのかもしれない。そして、今は部活を辞めて、家で一人パソコンと対決する毎日

そして、5月、学校が終わり下校一人東方アレンジ曲を聞きながら俺は下校していた。

すると、地面の下で異世界の入り口のような物が足の下に出現した。

神崎「……落ちたな……」

と言っわけで、落ちた。

まるで、直角のジェットコースターをシートベルト無しで駆け降りたような感じだ…

そして、悪夢の時間が終わり落ちた場所…そこは見たことが無い場所だった…いや、どこかで見覚えが…

見渡す限りの野原そこは時代を遡ったよくある絵本のような場所だった…

神崎「どこか、人のいる所に行こう、それからどうするか考えてみればいい…」

そう言って、この場所を去ったのだった…

場所を探して10分…ようやくとあるお屋敷にやって来た。だが、全てが紅い

神崎「ここは…紅魔館？」

そこは東方のゲームに出てくる紅魔館という館に全く似た場所だった。

あくまでも仮定だが、ここは、幻想郷なのかもしれない…

神崎「まあ…行かないと判らないか」

そういつて、門前に行った。

そこには、帽子に中と書かれたいかにも中国人のような門番がいた…

神崎「（紅 美鈴）あの〜」

返事が無い…ただの屍のようだ

ほうって行くか…そういつて中に入った。

中に入ると、なかも紅い…

まあ…いいや、早くカリスマの吸血鬼にあつてくるしかないな…

そして、俺は歩き始めた。

部屋を探して20分…

ようやく、主人の部屋らしい所についた。

だが、妙に静かだ…しかもなにか違和感を感じる…

そういえばさつきから、妖精やメイドを見ていない。

まあ…話せばわかるだろうな…

そういつて、俺はドアをノックをしてなかに入った。なかには、ゲームで見たことがあるカリスマ吸血鬼がいた

神崎「失礼します。夜遅くすみません。私、ここと違う世界日本から来た。神崎 宥希と言います。つかぬ事を伺いますがあなたは、レミリア・スカーレットですか？」

レミリア「そうよ…」すると、俺の顔に向けて弾を放たれた。それは牽制であった為、壁に当たった、その壁は木っ端微塵に砕けた。  
…これはヤバいな

レミリア「人間風情が…なかなか楽しめそうね」

神崎「俺の質問に答えてくれる優しさはあるか？」

レミリア「まあ…いいわ、もうすぐ死ぬんだから」とレミリアは微笑んだ、それは、まるで無邪気に遊ぶ子供のようにだが、死神のような不気味に笑う姿にも見えた。

神崎「ここは幻想郷でここは紅魔館」

レミリア「そうよ…」

神崎「じゃあ、なんで、いきなり俺を殺そうとしたはなんでだ？何もしてないぜ客として来ただけだし…」

レミリア「ハア…やはり人間は能無しね」

神崎「？」

レミリア「あなたは私の館に無断で入ってきた。この行為は私の反感をかった」神崎「あ…あれは違う！門番に頼もうとしたが、夜だったせいか、寝ていてこの混乱状態を治す為に一刻も早く確かめなかったんだ」

レミリア「で、来たと…まあ、ここに尋ねたのが間違だったわね」

神崎「…やるしかないのか」

レミリア「そうよ…もう、質問は終わりよ、じゃあいくわ！」すると、レミリアの後ろから、弾幕が現れた…弾数はノーマル辺り、これぐらいなら、東方をやり込んだ俺にはまだまだ余裕だな…

そして、レミリアがスペルを使った  
レミリア「なかなか、やるわね。人間、じゃあこれぐらいは避けれるよね」

天罰『スターオブダビデ』

無数のレーザーに円状の弾をうつ。

だが、俺は準備運動のようによける。

神崎（スペカは一応よけることはできるが…コレじゃ俺が疲れて終わりだ…だからなんとかしてレミリアを攻撃にしないとやられる…でも、なんだ？命を賭けて戦っているのになんでこんなに楽しんでいるんだ？）

そう、俺はいつもと違う出来事に胸を踊らせていた。ずっと戦っていたと思った。だが、それをするとは絶対死ぬ、それは嫌だ。だから俺は勝つ。

そして、俺は弾幕をよけながら、レミリアに走りながら距離を詰めるだが、現実には甘くはない、  
レミリア「人間の癖に案外頑張るわね、だから私も本気を出させてもらっわ！」

惨酷『紅く染まった悪夢』



聞いたことのないスペカだった。

難易度はルナティックを越えている

そのスペカは

低速弾から中速弾、最後に速弾といった順番で攻めてくる、しかも弾幕の隙間に向けて大粒弾が放たれる。これは弾壁だ。

神崎「これが、吸血鬼と人間の差…」

そして、俺は嘆いた、なんでこんなに悔しいんだ？なんでこんなに無力なんだ？俺だってレミリアと同じ力だと倒せるはずなのに…

力があれば！…

すると、頭にある言葉が過ぎった…

（自分の幻想を、現実にする力、強く思え！そして願え自分の為に！）

レミリア「残念だわ、こんなに楽しんだのは久しぶりよ新しいスペカを試せたし、じゃあそろそろ潮時だわじゃあね人間」

レミリアのスペカは宥希の囲んで宥希めがけてとんだ。

無数の弾が宥希を襲う…が宥希は死んでいなかった。

そして、レミリアが宥希の姿が変わっていることに気が付いた、

レミリア「人間、あなたは能力があつたのね…」

神崎「ああ、危なかったぜ。この力がなかったら、死んでいた。」

それは、幻想を現実にする程度の能力

さっきの包囲弾幕もアテナの盾、絶対防御のイージスの盾を頭で創造して出した。そして、今、右手に持っている盾がそうだ…

レミリア「面白いは人間。いや、吸血鬼かしら」

神崎「ご名答、これも能力だ。そうしないと、レミリアには勝てないからな…」

レミリア「…私をなめてもらうと困るわ、これでも、私は幻想郷で最強の吸血鬼と呼ばれていたから…」

神崎「じゃあ、やるか…」

レミリア「次で最後にするわ、」

そして、レミリアは槍を作り出した。

神槍『スピア・ザ・グングニグル』「じゃあ、俺も

神殺『スピア・オブ・ロンギヌス』

それは、漆黒のオーラをまとった巨大槍を出した。

レミリア「それがあなたの槍ね…じゃあ、いくわよ！」

二人は槍に全力を込めて投げた。

が…レミリアの槍の方が力を上回っていた。  
そして、レミリアが俺の首に爪を立てて切り裂いた。

神崎「ここは？」

天井は紅いかった…

神崎「あるえ？、俺は確か…レミリアにやられて…」

などと、考えていると…

？「目が覚めましたか、私はお嬢様の従者でメイド長の十六夜 咲  
夜です。早速ですが、お嬢様が部屋でお待ちです。行って下さい。」  
と完璧で冷静を装うメイド長の咲夜は言った。

神崎「ああ、判ったありがとう。さくy…」

と、お礼を言う前に咲夜は消えた。

神崎「速いな…おいw」

と、咲夜のチート能力に感激しつつ、部屋を出て、レミリアの部屋

に行くのだった。

部屋に行く途中にはメイドの妖精が掃除をして、初めて来た時のあの違和感はなく、活気があった。

そんなこんなで部屋に着いた。

神崎「（……やっぱ、絶対服従……）」

そう、呼ばれた理由を考えてつつ、ドアの部屋をノックした。

レミリア「あら……入っていいわよ」

戦う時の殺気の帯びた冷徹な声ではなく、優しく暖かい声であった

神崎「（あれ？）失礼します。」

そう言って入った。

部屋は戦いの跡は無く、綺麗な赤色部屋だった。

## 異能力（後書き）

なんか主人公チートですね。

ですが主人公の能力は現実だと少し能力が限定します。

まあ、それは今度という事で

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1304m/>

---

東方宥希想

2010年10月10日21時51分発行